

発露懺悔文

前号の本欄では松岡農水相の自殺を取り上げ、いまや「懺悔」も死語になっていく、と書いた。そう結びはしたのだが、原稿を編集部に送ってからさらに気になった。実はもともとと大切なことであり、懺悔こそが宗教の根幹ではないか、という思いが募ってきたのだ。

我昔所造諸悪業
皆由無始貪瞋癡
従身口意之所生
一切我今皆懺悔

前回は、華嚴経にあるこの懺悔文さんげもん

南
無

善
財

すがわらのぶお
菅原伸郎

東京医療保健大学教授

を紹介した。さまざまな修行の場であくごう、「がしゃくしよぞうしよあくごう、かいゆうむしとんじんち、じゆうしんくいししよしよ、いつさいがこんかいさんげ」と読み上げられるが、短かすぎるためか、儀礼に流れる場合もある。

真宗大谷派の集まりでそんな話をする時、C先生が「ほかに『発露懺悔文』もありますよ」と教えてくださった。新義真言宗の祖・覚鑑かくかんが一一三五年ごろ、三年余の無言行をし

ながら綴った、とされる偈文だ。全文の引用はできないが、だれの耳にも痛い罪過がこんな調子で並んでいる。

《我等懺悔す。……遊戯笑語して徒らに年を送り、詔誑てんのうそぎ詐欺（へつらいとあざむき）して空しく日を過ぐ。善友に随がはずして癡人に親しみ、善根を勤めずして悪行を営む。利養を得んと欲して自徳を讃じ、名聞を欲して他愚を誹る。……是の如くの無量の罪、今三宝に對して皆発露し奉る。慈悲哀愍して消除せしめ賜え……》

ほかにも《珍財を慳吝けんりん（ものおしみ）して施を行ぜず》などであり、凡愚の身に聖道門の修行は厳しいなあ、と絶望的になった。では、覚鑑

さん本人はどうだったのだろうか。高山野山をめぐる争いに振り回された方である。世間の倫理的な悪を箇条書き風に書き並べ、それらを一身に背負って詫びているが、私には自身の内面性があまり感じられなかった。たとえば、華嚴経の懺悔文が「われ懺悔す」としているのに対して、こちらは「われら懺悔す」と主語が複数なのである。

もう一つ、終わりに「無量の罪を消除せしめ賜え」とある点も気になった。反省はもちろん大切だが、罪は懺悔や祈りで消し除けるのだろうか。日蓮聖人の「光日房御書」にも《小罪なれども、懺悔せざれば悪道をまぬかれず。大逆なれども、懺悔すれば罪きへぬ》とあるが、そも

そも滅罪、浄罪とは何だろう。

神道では、禊ぎひそぎをして過去を水に流す。ヒンドゥーにもイスラームにもキリスト教にも似た儀式がある。罪や穢れを細菌のように考えた古代人の呪術的名残だろう。だが、本当のところ、この私自身の罪障は消せるものなのか。いや、消し去っていくのだろうか。生涯、抱いていくべきではないのか。

先の戦争に負けた後で「一億総懺悔」という言葉がつくられた。そして、開戦内閣の一員でありながら総

理大臣になった人もいる。しばし謹慎して水をかぶり、「ああ、さっぱりした」ということだったのか。

こうなると、道元、親鸞、あるいは蓮如といった方々も読み直したくなる。それは後日に譲るとして、今回は日本現代詩人会の会長も務めた村野四郎さんの「蛞蝓なめくじ」という作品を紹介して結びたい。

この陰気な経歴

口々にじめじめした退屈の泥濘に
巢喰い

声を怖れ 光をおそれ くらい無
意志のかげに匿れる――

そして後ろへひくものは
あ、かくもあきらかな悔恨の筋あ
跡あとばかり――

